



草木の刈り取り作業に励む石山さん(13日、浜松市天竜区)

県山林協会(静岡市)で  
は、年2回、就業に関する  
就職活動の時を振り返った。

た。 10人以上の就職に結びつい  
たといふ。

林業の魅力を伝えよう

当しました

## よみがえる 林業

今月13日、浜松市天竜区の山林で、林業や製材業を手がける「フジイチ」(同区、社員数49人)の新入社員石山珠緒さん(19)が草刈り機で低木や雑草を刈り取っていた。石山さんは浜松市中心部の出身で、70年の歴史を持つ同社で初めての女性の「キコリ」だ。力作業や危険な作業がある「男の職場」だけに、石野秀一社長(53)は「体力面で心配もあったが、何より熱意があり採用した」と話す。教育担当の滝沢武さん

(41)も「まじめに取り組んでいる」と口を細める。「山は空気が澄み、鳥や虫の声が聞こえてくる。机に座っているよりも体を動かす方が好き」という石山さんは、安全な作業方法や杉やヒノキなど木の見分け方などを学ぶ日々だ。独り立ちには最低で3年かかるといい、早く一人前のキコリになろうと奮闘している。

◆ 県内の林業作業員数は1995年に13334人いた

この追い風を生かそうと、林業への関心が高まっている」(石野社長)といふ。この追い風を生かそうと、林業の会社や業界団体は若手を中心と手確保に力を入れている。

例えば、フジイチは、伐採作業の見学や下草刈り体験など、就職を希望する高校生や大学生の見学を積極的に受け入れている。ホームページも充実させ、社員紹介のほか、会社への質疑応答コーナーも掲載し、会社を紹介している。石山さんも「アットホームな職場で働きやすそうだった」と就職活動の時を振り返った。

相談会を開催している。今年1月中旬、静岡市内で開かれた相談会では、県内の16社・団体が設けたブースに、県内を中心とする36人が訪れ、仕事の内容や雇用条件などを話し合った。

担い手部長の菅野実さん(62)は「人工林が本格的な伐採期を迎へ、需要拡大に取り組む中、肝心の担い手が不足している。多くの人にこの業界に入つてもいいたい」と呼びかけている。

全国森林組合連合会(東京)も国の委託事業で全国で林業体験や資格取得などができる講習を行っていきる。受講料は無料で、宿泊費の補助も出る。県内では14年に起業した。「自然に寄り添うキコリの暮らしを同市の中山間地「玉川地区」の暮らしに魅力を感じ、街中の人々や子どもたちに知つてもらい、これからもずっと受け継いでいきた

い。本当の豊かさがここにある」と原田さんは語った。

(この連載は秋山洋成が担当しました)

# 一人前キコリへ奮闘

## 奮闘

と、若手の担い手たちも動き出している。浜松市天竜区の若手林業関係者で作るグループ「TENKOM ORI(てんこもり)」は、中学校などを対象に出前授業を行っている。石山さんも中学2年の時、授業に参加した「教え子」の一人だ。

今月14日、静岡伊勢丹(静岡市)で地域産材のオクシグス材を紹介するイベントが開かれていた。オクシグス材を使ったおもちゃを販売していた、林業会社「玉川きこり社」(同)の原田さん(37)は、林業の紹介とともに、キコリの暮らしを体験してもらう環境教育を行っている。

静岡大卒業後、静岡市内の出版社でカメラマンとして働いていた原田さんは、同市の中山間地「玉川地区」の暮らしに魅力を感じ、街中の人々や子どもたちに知つてもらい、これからもずっと受け継いでいきた

い。本当の豊かさがここにある」と原田さんは語った。

(この連載は秋山洋成が担当しました)